

## 主張 災害の歴史から学ぶ防災対策

1717年（享保二年）の「陰徳太平記」によると、八木村（現安佐南区八木）にある阿生山の中迫という所に大蛇が現れ人々の往来を乱した。1532年（天文元年）室町時代の春、中腹に現れた大蛇を地元の香川勝雄が退治した。大蛇の首が落ちた池を「蛇王池」といい、「蛇王池伝説」があり、「蛇王池の碑」の石碑と「蛇王池の一部」が現在も残っている。「陰徳太平記」の中で土石流を思わせる記述があり、阿武山（旧阿生山）の地形と下流の沖積錘の形成をみると、蛇王とは土石流と考えられる。先人が後世のために教訓として建てたものである。しかし、これを無視して、「開発」の名で危険地域に土地造成がなされた。当時の行政担当者は取材に答えて「開発業者と地主の要望が強かったので許可した」と述べているが、安全性をないがしろにした行政の責任は大きい。

1999年6月29日、広島市佐伯区を中心に土砂災害が発生し、犠牲者が出た。これを機に土砂災害防止法が制定され、警戒区域と特別警戒区域が指定された。広島県では危険地域は3万1987カ所あり、今までに全体の30%しか指定されていない。また、広島県の砂防などの予算が年々減額されていることが昨年8月19日の議会で明らかになった。皮肉にもその翌日に八木地区に短時間集中豪雨で土石流が発生し、72人が犠牲になり、可部高松山流域でも2人が犠牲になった。この集中豪雨は1時間に100mm超というとてつもない雨量であった。積乱雲1個で1時間降ると、20～30mmの雨と言われていることから、1時間で積乱雲が5個発生したことになる。

積乱雲を次々発生させ、線上降水帯を作ることをバックビルディングと言う。水蒸気を多く含んだ南風が豊後水道を渡り、1000m級の中国山地にぶつかって積乱雲が発生する。解析度が高まった気象衛星ひまわり8号の活躍が望まれる。

土石流の歴史の調査では、現地での地層を見つける。炭化した樹木、放射性炭素検査などの調査で、土石流の発生頻度、土石流の範囲（発生規模）などで、溪流のもつ長期的リスクが解る。最近可部東地区の調査で、1200～1100年前、500～400年前、1956年以降の3回土石流が発生したことが分かった。2015年度からは航空レーザー測量が始まっている。先人たちが残した記録（文献）・石碑などを解析し得られた情報や科学的に地質などの痕跡を分析して得られた情報を組み合わせて、土砂災害からの被害を少なくする時間防災学の考えもある。

また、避難についても考える必要がある。日本では漢字2文字で避難しかない。「危ないから逃げろ」としか理解されていない。欧米では、3種類に分類されている。1つ目は緊急避難（evacuation）、2つ目は滞在避難（sheltering）、3つ目は難民避難（refuge）である。2つ目と3つ目は行政が対応できるが、1つ目は個人個人で住んでいる条件が違い、行政の避難指示の伝達に困難さがあり、最終的には「自分で判断」し、想定に拘らずに率先して行動することである。前提としてそれぞれ地区の危険性やその対応策を行政として明確にして住民に伝える必要がある。

最後に自然災害は繰り返す、自然の脅威には勝てない。「災害から逃げる」「自然の力を分散させる。和らげる」ことが必要である。自分たちが住んでいる地域の地理条件、気象条件、石碑など歴史の教訓を調べ上げ、それを生かすことが防災につながると思われる。

（参考：2015年6月12日（金）RCCテレビNEWS6スペシャル「歴史は警告する～土砂災害と広島～」）

（2015. 8）